

おじゃまします

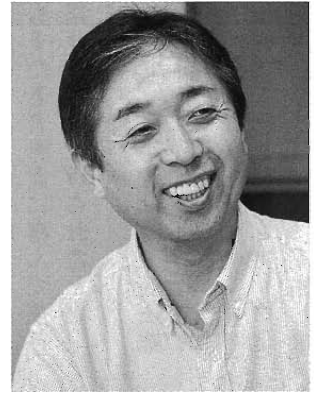
さかき新企業人インタビュー⑩

柳澤一男さんプロフィール

ヤナギサワカメラ 店主

昭和34年、坂城生まれ。大学卒業後、東京工芸大学短期大学部で写真技術を習得。卒業後は都内で写真撮影業務に携わり、昭和62年に実家のヤナギサワカメラを継ぐ。現像DPEのほか、カメラマンとしてスタジオ撮影、学校などでの集合写真撮影なども。自身が撮った山岳写真や風景写真で個展を開き、ゆくゆくは写真集を出版したいと、休日や出張時には各地でファインダーをのぞく。

カメラを通して地元之恩返し 美しい風景を美しくプリントして 観る人をなごませたい



坂城でカメラ店を開いて半世紀。カメラが高級品だった時代から、今や誰もが簡単に撮れるデジタルカメラに変わったが、写真を美しく仕上げるのは、結局、「人間のアナログなこだわり」ではなからうか。柳澤さんと話していてそんな思いを持った。

「カメラ店として50年の歴史があるそうですね。」

「カメラ好きの父が昭和33年に始めましたから、もう半世紀。当時、カメラは高級品でしたから、ショーウインドウにはカメラの現物ではなく、カタログを並べて注文をいただいた、といったエピソードもあります」

「社長ご自身も小さい頃から写真がお好きだった？」

「それが好きではなかったんですよ(笑)、身近すぎたからでしょうか。しかし大学を卒業してカメラをやりたくなり、写真専門の東京工芸大学短期大学部(当時)に入りました。それからは写真漬けの毎日です(笑)。卒業後は都内の撮影スタジオに入り、

主に婚禮写真を撮っていました。坂城へ戻ったのは父が2号店を出すことになり、この店を私が任されることになったからです。私が戻ってカメラ現像処理機を自社導入しました。それまで外部に出していたのを自社で現像プリントすることで、時間が短縮し、色味や仕上がりを自分で品質管理でき、お客様のニーズに応えられるようになったと思います。ただ、私自身、仕上がりにもこだわるので連日徹夜になることもたびたび。いま思うと若かったから出来たのかなとも思いますね(笑)」

「今やカメラもデジタル全盛。フィルムというアナログな世界からデジタルに変わりましたが、その流れをどうお考えですか。」

「現像プリントから画像処理に変わり、作業自体は効率的になったと思います。ただ量販店の作業は画的で、仕上がり(プリント)に満足されない方も少なくないようです。特に昔からの写真ファンには。そうした方々の満足を得るには、やはりこだわりの大切でしょう。ウチのような

小さなカメラ店はなおさらです。より専門性を高め、お客様一人ひとりのニーズに合わせてきめ細かく対応して、撮影実技の相談にも乗れる、そんな店を心がけています」

「カメラマンとしては？」

「撮影は半分趣味ですが、卒業アルバムの撮影制作、遺影用のスタジオ撮影なども人気があります。これは生業としての撮影ですが、自分の撮りたい被写体として山岳風景を撮り続けています。長野には北アルプスの涸沢や戸隠鏡池、白馬八方池はじめ素晴らしい撮影スポットがいっぱいあります。撮り溜めたものをいざれ写真集として出したいですね。それと、これはボランティアというほどではありませんが、老人ホームや公共の施設に写真パネルを飾ってもらうことも続けています。地元への恩返しという気持ちもあります。もうひとつ、みんなで美しい風景を体感できるように、トレッキング感覚で気軽に参加して、楽しめるようなツアーをコーディネートしてみたいという夢もあるんですよ。」